

## 左官業界とのコラボレーション

当社は、高度経済成長期と呼ばれる 1960 年代から造園業、造園資材卸業を営んできました。振り返ってみると、現在に至るまでに幾度も大きな世情の変化があったことが思い出されます。高度経済成長、オイルショック、公害の時代、バブルとその崩壊、長期デフレ時代、小泉構造改革とその歪み…そして今もまさに、政権選択選挙を来月に控えています。

こうした中で、造園を取り巻く環境もずいぶん変化してきました。例えば、高度経済成長期から 80 年代には、工場建設が盛んで、同時に公害問題もクローズアップされていきましたから、工場敷地内の緑化のために多量の樹木が使用されることがありました。また、バブルの頃は旅館の庭園に大きな自然石が配置され、あるいはゴルフ場建設のために芝生の販売が伸びた時期もありました。逆に現在では、工場閉鎖が相次ぎ、新規に旅館の庭園やゴルフ場を建設する話など、すっかり聞かなくなりました。公共事業にしても、田中角栄氏の日本列島改造計画の下、大規模な事業が展開されていた時代から、今では「無駄遣いはダメ」という大義により、地方の道路建設が工事途中でストップするといった時代になっています。また、個人の邸宅でも、和風家屋ではなく洋風家屋が主流になりつつあります。当然、こうした時代の潮流を受けて、当社の経営にも常に改革が求められてきました。取り扱い樹種の増加、新たな植木産地との関係構築、国外に新たな石材産地を求め、貿易仲介業務のノウハウを身につけるなど、新たな挑戦を繰り返してきました。上手くいったこと、いかなかったことがあります。こうした新たな挑戦は今後も続けていかなければならないと考えております。

21 世紀は「和解の世紀」という言葉を、先日テレビから耳にしました。これは、アメリカのオバマ大統領の就任に関するニュースの内容であったと記憶しています。この「和解」という言葉…国家、宗教、人種…と様々な主体間の和解を指すのでしょうが、競争主義から協働主義への変革も含まれるのではないかと思います。すなわち、企業間の競争ではなく企業間の協働、業界間の競争ではなく業界間の協働、さらには伝統と流行の対立ではなく伝統と流行の合体というように、自由な発想によって、関係主体が総じて幸福を得られるような、そんな社会構造を構築すべきだということを示しているのではないでしょ

うか。例えば、我々の業界であれば、産地や卸業者、施工業者や関連業者、そして消費者が、ともに発展していける道を探求することが、時代の潮流なのだと示しているように感じます。そこで、「然らば、当社が進むべき道は…？」と考えた時、冒頭の主題に記した“左官業界とのコラボレーション”という方向性を見出したのです。

小林澄夫さんが書かれた『左官礼讃Ⅱ泥と風景』（石風社 2009）という本を先日読みました。書店で偶然見つけたのです。左官という仕事の奥深さや伝統技能の尊さが熱く綴られていました。その中に、「昭和十三年の左官材料」という項があります。多種多様な左官材料が列記された後、小林さんは「このうちの何が残り、何が消えたのか…」と結んでいます。左官という仕事はもちろんのこと、日本にはいくつもの貴重な伝統技能があります。しかし、それらの内の幾つかは、他の技術の発展により、あるいは流行の変化により衰退していきました。ですが、21世紀を和解の時代と捉え、そこには伝統と流行の合体があるとすればどうでしょうか。伝統には斬新な価値が付加され、流行には不変の価値が加えられるのではないのでしょうか。

当社は、造園資材の卸業を通して、業界内の流通の仲介役を担ってきました。しかし、これからは業界内と業界外の仲介役も目指していきたいと考えています。その端緒として、“左官業界とのコラボレーション”に挑むことを決めました。

「その結果、造園の世界、左官の世界がともに発展する、そんな原動力を生み出したい。—そうなれば、卸業者冥利に尽きる。」、このように考えています。

(2009.7.31 金沢庭材株式会社 経営者談話より 編著：野嶋章吾)